

きのこ関連図書の紹介

吹春 俊光

2003年に届いたきのこ関連の書籍を、到着順に紹介します。

「きのこの細道」

著者：本郷次雄，1800 円 + 税，234 頁，トンボ出版，2003 年 5 月初版発行

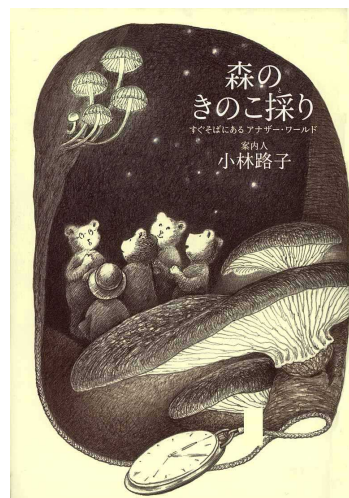
長い間ご指導頂いている本郷先生の、これまでに書かれてきた 44 のエッセイが本となった。あまり一般に流通しない雑誌や学術刊行物に書かれたものが多く収録され、これまで一般の本郷ファンにはほとんど知られていなかったものが多い。様々なきのこを採集され、記載されたときの思い出、著名な海外のきのこ研究者である R. シンガー、E.J.H. コーナー先生などの紹介もある。マツタケのすき焼きを野外で食べる G. ワッソン先生の珍しい写真も掲載されている。美しい本郷先生の挿し絵や写真も多数入っている。本書の唯一残念な点。初出の雑誌名と年代を省いてあることである。お買い得です。



「森のきのこ採り - すぐそばにあるアナザー・ワールド」

著者：小林路子，1800 円 + 税，225 頁，白日社，2003 年 8 月 8 日第 1 刷発行

「なにがなんでもきのこが好き」(日本経済新聞社)に続く、痛快きのこエッセイ。著者は美貌の画伯。きのこの絵を描く前は抽象画家。その後、超精密かつファンタジックなきのこ画にとりくむようになり、特に正体不明の動物(熊か？妖精か？)が描きこまれたなきのこ絵は、世界に無二の新境地。エッセイもすごい。「すぐそばにあるアナザーワールド」なんて、並の人のセリフではない。そう思った人は、すぐ書店に注文してください。買って損はありません。



「きのこ博物館」

著者：根田 仁，2000 円 + 税 ，238 頁，八坂書房，2003 年 9 月 10 日第 1 刷発行

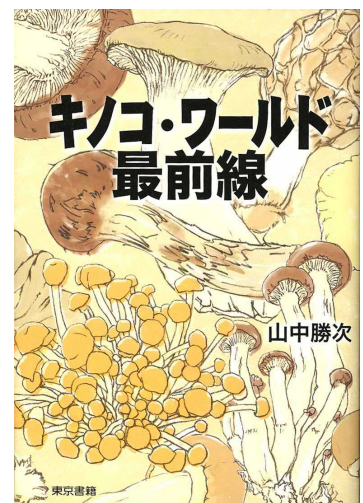
「特産情報」というきのこ業界雑誌に 4 年間掲載されたエッセイが 1 冊となった。古本屋めぐり、百科事典あつめ、等が趣味の著者は、古今東西の古書・稀覯本をネタにきのこ古潭を語るのである。例えばホウライタケ属等の菌糸束、いわゆる山姥の髪の毛が「野栗権現が流したもう陰毛である」とされた江戸時代のトピック等々。日本人がきのこに対してはじめてつけた学名 *Lactarius hatsutake* (ハツタケ) より、もっと古い学名を著者が発掘したことなど、著者のきのこ研究の一端を知る記述もある。この蘊蓄きのこ学の方針はかつて小林義雄先生の独壇場だったが、根田さんはその後継者となる気配。本書は末ながく読み継がれる良書の趣があります。



「キノコ・ワールド最前線」

著者：山中勝次，1600 円 + 税 ，268 頁，東京書籍，2003 年 11 月 7 日第 1 刷発行

著者は、今をときめくあのホクトの研究所の元所長で、エリンギをひろく世に広めた人である。元々外生菌根屋であったこと、その後食用きのこ会社に勤務したこと等が反映しているのか、本書はマツタケとトリフの話題からはじまる。中国で現地調査をおこない、四川省西部の東チベット高原のマツタケのほとんどは、常緑性コナラ属の森林で採集されること(これまでマツタケはかならずマツ科の樹木と共生しているということになっていた) 中国産の黒トリフが、フランスに輸出され加工食品として日本に仏蘭西トリフとして輸入されていること、中国のトリフの採集の方法は資源を枯渇させるような採集方法であるため改善が必要であること、などなど、現地の貴重な写真もふくめて、「知られざる」情報もりこまれている。その他に、今年の初めに話題になった「膺マツタケ」騒動の真相、ブナシメジの H 社とマイタケの Y 社の「仁義無き戦い」、近年着目される「機能性食品」としてのきのこ、等の紹介もある。タイトルにいつわりなく最近のきのこ産業トレンドを把握するには格好の書かもしれない。著者は料理好きのヒゲオヤジ先生で、2000 年からは関西の旧帝大で、きのこ学の講義も担当しておられます。

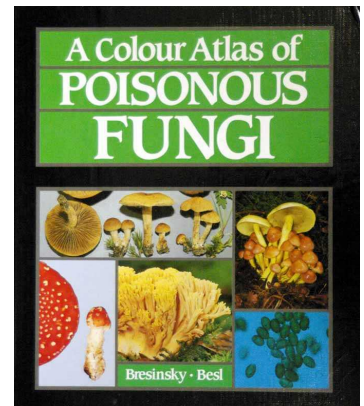


「カラーアトラス 有毒きのこ」

著者：A. Bresinsky・H. Besl, 津田盛也・横山和正・米田該典
(監訳), 廣川書店, 50,000 円 + 税, 2003 年 9 月 30 日発行

本書を手にしてまず驚いたのは、その価格である、5 千円の間違いかと思ったが、よく見ると、定価 5 万円。ウェブ本屋のアマゾンで検索したところ(2003 年 11 月 12 日、<http://www.amazon.co.jp>)、独語版は在庫切(価格：4,776 円) 英語版は 19,209 円(定価：17,462 円 + 手数料 1,747 円, U.S. 定価：\$160.00)と紹介されている。私が、1991 年 7 月に通販で購入したとき独語版(ペーパーバック)は 74.9 sFr. (スイスフラン、約 7,000 円) 英語版は(ハードカバー)は 184 sFr. (約 16,000 円)であった(スイス、クリプト社)。さて、本題。本書は、ドイツ語版(1985)の英訳を日本語訳したものである。図版は、版元から図版だけがいっぱいのものを廣川が購入し(たぶん)それに日本語訳を印刷したものである(たぶん)。分類の部分はやや年代を感じさせるものの、猛毒のフウセンタケ属など、これまで知られてなかった毒きのこ情報がふんだんに盛り込まれている。宝くじが当たったとき、何かの予算が余ったとき、この本を思いだしてください。参考まで、安価に手に入る英語版のタイトルもつけておきます。

英語版, 題名; Colour Atlas of Poisonous Fungi: A Handbook for Pharmacists, Doctors and Biologists, 出版社; Wolfe Publishing Ltd, 出版年; 1990, ISBN; 0-7234-1576-5.



「日本の毒きのこ」 フィールドベスト図鑑 Vol.14

著者：長沢 栄史, 1900 円 + 税, 280 頁, 学習研究社, 2003 年 10 月 4 日発行

今でも小山昇平著(1992)日本の毒キノコ 150 種(ほおずき書籍)は名著だと思っているが、とうとうメジャー出版社から毒きのこ専門のハンドブックが出た。毒きのこ成分も構造式が添付された解説付で本格的。お医者さんの奥沢先生による、きのこ中毒日本の歴史も掲載されている。珍しいところでは猛毒菌ミカワクロアミアシグチ(28 頁参照)の写真の掲載もある。ツキヨタケの属名が *Omphalotus* であることなどの紹介もあり、最新情報も盛り込まれている。しかし毒きのこの種数を増やす努力のためか、なんだか関係ないよ、というもので掲載されているのでは、と思ってしまう。でも毒きのこ愛好家は 1 冊もっていてもよいかもしれません。

